

【修士論文要旨】

名古屋市内のプロテスタント教会 —礼拝への参加と宗教系私立学校とのかかわり

西 田 汐 里

概 要

本論文は名古屋市におけるプロテスタント教会の歴史的経緯を確認しつつ、プロテスタント教会における礼拝に参加する人々と宗教系私立学校に注目し、現代における教会の活動及び信者と宗教系私立学校とのかかわりを、筆者が行った教会での聞き取り調査をもとに論じていくものである。名古屋市は他の都市と比べ伝道が出遅れたことで街の規模の割に教会数の少ない都市であり、非クリスチャン家庭で生まれ育ったキリスト教徒の多くが金城学院中学校の出身者であることは名古屋市のクリスチャンの特徴といえる。教会の運営の形が現代社会には合わなくなっていることや学校が教会訪問を強く勧めたり受洗を促したりしなくなったことが、教会から人が減る原因になっている。また、高齢での受洗者の中にはプロテスタント系学校の卒業生で高齢になってから洗礼を受ける人がいるが、ここに再帰性がみて取れる。

キーワード：キリスト教、プロテスタント、礼拝、宗教系私立学校

Protestant Churches in Nagoya:

Participation in Worship Services and Relationship with Private Religious Schools

Shiori Nishida

ABSTRACT

This paper examines the historical background of Protestant churches in Nagoya City, focuses on people who participate in worship services at Protestant churches and religious private schools, and discusses the activities of the church in the present day and the relationship between believers and religious private schools, based on interviews conducted by the author. Many Christians born and raised in non-Christian families are graduates of Kinjo Gakuin Junior High School, which is a characteristic of Christians in Nagoya City. The fact that the way the church is run is no longer suitable for modern society, and that schools no longer strongly encourage church visits or encourage baptism, is the cause of the decrease in the number of people in the church. In addition, some of those who are baptized at an older age are graduates of Protestant schools who are baptized at an older age, and reflexivity can be seen here.

Keywords: Christianity, Protestantism, Worship, Private Religious Schools

I. はじめに

宗教の世俗化や宗教に対する忌避感がある現代日本社会で、あえて一神教の宗教であるプロテスタント教会の礼拝に参加する人々は、どのような経緯や動機をもって礼拝に参加したり洗礼を受けたりし、宗教コミュニティに参加することは信者にとってどのような利益をもたらすのか。また、教会によって、どのような差異があるのか、名古屋市という地域においてどんなキリスト教の特徴があるのか。本論文はこうした問題を、特に若者の教会活動への参加と宗教系私立学校を中心に、名古屋市内の6教会とプロテスタント系の女子学校である金城学院を主な例として検討していく。

キリスト教については様々な分野で研究が行われているが、礼拝や教会学校のような教会内における活動での信者同士の関わりについての宗教学的研究は乏しい。しかし近年、野川（2023）や最相（2023）による、一般のキリスト教徒に着目した記述が現れている。名古屋市のキリスト教会の研究については真山（1986）に詳しいが、ほかには各教会が独自に発行している教会史があるのみであり、名古屋市全体を概観できるものはほとんどない。

本論文はこうした状況を踏まえ、歴史的経緯を確認しつつ、プロテスタント教会における礼拝に参加する人々と宗教系私立学校に注目し、現代における教会の活動及び信者と宗教系私立学校とのかかわりを、筆者が行った教会での聞き取り調査をもとに論じていくものである。

II. 名古屋市内的におけるプロテスタント教会の全体像

開港地である横浜・東京と神戸・大阪が布教の出発点であり、名古屋市でプロテスタント教会による布教活動が始まったのは1877年頃のことである。1878年のメソジスト監督派による名古屋美以教会（現日本基督教団名古屋中央教会）の設立を皮切りに着々と新たな教会が成立していき、1936年にはカトリックや正教会を合わせ、名古屋市には39の教会があった。

1887年から1898年にかけて、複数のキリスト教系学校が設立された。1887年に名古屋英和学校、1888年には名古屋清流女学校（1920年廃校）、1889年に女学専門冀望館、1898年には柳城保姆養成所がそれぞれ設立されている。

1940年の宗教団体法の施行により、1941年に、日本最大のプロテスタント教団である日本基督教団が誕生する。戦時中においては、名古屋市は空襲によって甚大な被害を受け、教会堂や牧師館が焼失した教会も多い。第二次世界大戦後、宗教団体法が廃止され教団の教憲が改正される中、1945年から1950年に日本全体で「キリスト教ブーム」が起こり、信徒の数は爆発的に増えたものの、そこからは減退の一途を辿っている。

『キリスト教年鑑2023～2024』によると、2024年現在、名古屋市では133教会が活動をしている。現在活動している名古屋市内の日本基督教団の教会のうち、半数弱が戦後の成立である。名古屋市においても、永井ら（2006）が指摘した通り、治安の良い閑静な住宅街がある市の中央部に教

会が集中していることが分かる。

Ⅲ. 礼拝・教会活動への参加と教会運営

調査を行ったのは、名古屋市内の日本基督教団に属する、名古屋中央教会、金城教会、名古屋教会、中京教会、愛知教会、名古屋新生教会の6教会である。教会での調査として、日曜日に行われる主日礼拝や教会内での催しに参加して活動の様子を観察するとともに、教会を訪れている人や各教会の牧師から話を伺った。

少子高齢化が進む中、それぞれの教会で、キリスト教の教えを伝え教会員の信仰生活を守りながら、社会に対する貢献が行われており、具体的な内容は異なるものの、いずれの教会においても特に保育や教育の面における社会貢献が行われていることが多い。特に、今回調査した6教会の全てで教会学校が開かれており、4教会が幼稚園や保育園、学童、保育所の運営を続けている。それらの活動の根底にあるのはキリスト教の教えであり、ボランティア活動や寄付など、教会の人々は自ら使命感をもって行動を起こしている。

Ⅳ. 教会訪問・受洗の動機

6教会において、聞き取り調査を行い、教会に通うようになった理由について、48人に話を伺うことができた。その調査をもとに、「クリスチャンの家庭で育ったため」、「キリスト教系学校在学中に影響を受けたため」、「友人や職場、西洋芸術から影響を受けたため」、「自ら求めたため」の4点に分けてグループ分けを行うと、「クリスチャンの家庭で育ったため」を挙げたのが21人、「キリスト教系学校在学中に影響を受けたため」が16人、「友人や職場、西洋芸術から影響を受けたため」が7人、「自ら求めたため」が4人であった。いずれの教会においても、戦後のキリスト教ブームで受洗した世代の高齢化と若者の減少は著しい。そもそも日本社会全体で少子高齢化が進んでいることもあるが、それでも壮年層から若年層の礼拝参加は極端に少ない。

礼拝に参加する人のうち、そのほとんどがクリスチャンホームで育った人々か、キリスト教系学校に通ったことをきっかけとした人々であることが分かったが、30代から50代の壮年層やその子どもが各教会で数えるほどしか通わない現状を鑑みると、今後ますます教会へ通う人が減っていくと予想される。また、子どもの礼拝参加の様子は教会によって異なり、併設の幼稚園との連携を強く取っている教会では幼稚園生やその卒園生が教会学校に訪れており年齢層が広い傾向にある。

Ⅴ. 教会と学校教育

名古屋市のプロテスタント系学校法人は、学校法人金城学院、学校法人名古屋学院、学校法人

柳城学院の3つがあり、そのうち中学校と高等学校をもつのは、学校法人金城学院と学校法人名古屋学院の2つであり、本論では金城学院を主な例とした。

金城学院中学校・高校では、全校生徒が参加する毎朝の礼拝や宗教行事、教会の礼拝への参加の課題を行い、金城学院大学でも全学生が前後期の4単位にわたる「キリスト教学」の授業を受講し大学内の礼拝に参加することで、金城学院に通う全ての生徒・学生がキリスト教に触れている。金城学院においては、キリスト教に関する知識を教える宗教知識教育を基礎としつつ、実際の宗教活動や宗教に触れる際注意すべきことを学ぶ宗教文化教育としての側面ももっており、金城学院が宗教教育を重視していることが伺える。

Ⅵ. さいごに

教会に通う人々は、礼拝や教会での諸集会を通して信仰と真理を得ており、その上で教会での交流による満足感を得ている。信仰を得て心豊かに生きていくことがクリスチャンとしての意義であり、他者との交流は、継続的に教会へ通う意欲をもつための副次的な要素であることが分かった。

名古屋市は街の規模の割に教会数の少ない都市といえるが、その中でもそれぞれの教会が礼拝を守っている。非クリスチャン家庭で生まれ育った人に関して、その多くが金城学院中学校の出身者であることは名古屋市のクリスチャンの特徴といえるだろう。実際に、筆者は各教会で何人もの金城学院中学校の生徒を見ており、その中の数人は継続的に教会に通っている。

教会の運営の形が現代社会には合わなくなっていることや学校が教会訪問を強く勧めたり受洗を促したりしなくなったことが、教会から人が減る原因になっている。また、高齢での受洗者の中にはプロテスタント系学校の卒業生で高齢になってから洗礼を受ける人がいるが、ここにある種の再帰性があることがみて取れる。少子化の中教会を訪れる子どもは少なく、ましてや彼らが大人になってから洗礼を受けるとは限らないが、教会で行われる礼拝の参加者や受洗者を増やすことだけが学校における宗教教育ではない。実際の礼拝に触れることや、授業で宗教について学ぶことは、いつか生徒にとって、不都合を回避する手段になり得る。

教会へ通い始めたきっかけが家庭環境にある人が半数近くいても、教会へ通い続けるということに関してはそれぞれに違う動機や理由をもっていることが浮かび上がってきた。それでも、信徒同士の横の関係と神との間にある縦の関係の、二つのやり取りをもつ信仰の場だからこそ、時に衝突をしながらもコミュニティを保つことができるものである。

本論文では教会と学校とのかかわりを主軸に調査したため、ほかの地域や他教派を含めた調査は十分ではない。特に、若い人が集まるという、都心部に拠点を置く単立教会の調査が必要だろう。また今後の教会の変化として、教会の運営はどのように変わっていくのか、この先も老後を迎えたキリスト教系学校の卒業生が教会を訪れることが頻繁にあるのかについては未知数である。加えて、学校が今後、どのように教会と生徒を繋いでいくのか、今後の調査に託したい。

参考文献

- 愛知県史編さん委員会編（2020）『愛知県史 通史編7 近代2』愛知県.
- 愛知県史編さん委員会編（2020）『愛知県史 通史編8 近代3』愛知県.
- 麻生将（2021）「近代の愛知県におけるプロテスタント教会の立地傾向—1916年から1940年—」2021年人文地理学会大会（2021年11月20日-2021年11月21日於関西学院大学）.
- 井上順孝（2011）「グローバル化・情報化時代における宗教教育の新しい認知フレーム」『宗教研究』84/2：331-358.
- 井上順孝（2020）『グローバル化時代の宗教文化教育』弘文堂.
- 海老沢有道，大内三郎（1970）『日本キリスト教史』日本基督教団出版局.
- 落合建仁（2017）「金城学院大学におけるキリスト教教育の歩み——時代背景との関わりで」、『金城学院大学キリスト教文化研究所紀要』20：23-55.
- キリスト教年鑑編集委員会（2022）『キリスト教年鑑2023～2024』キリスト新聞社.
- キリスト教文化事典編集委員会（2022）『キリスト教文化事典』丸善出版.
- 最相葉月（2022）『証し日本のキリスト者』KADOKAWA.
- 橋木俊詔（2013）『宗教と学校』河出書房.
- 永井恵一（2006）「明治以降の東京におけるキリスト教会の立地とその要因に関する研究」、『都市計画論文集』41/3：935-940.
- 日本基督教団事務局編（2024）『日本基督教団年鑑2025年版』日本基督教団出版局.
- 野川陽介「現代日本におけるプロテスタント教会の文化人類学的研究」中部地区研究懇談会修士論文・博士論文発表会「中部人類学談話会第270回例会」（2024年5月25日於南山大学）.
- 真山光彌（1986）『尾張名古屋のキリスト教一名古屋教会の草創期一』新教出版社.
- 真山光彌（1992）『愛知のキリスト教』新教出版社.